

伊勢から会津へ・会津染型の継承と活用研究

インテリアゼミ A2201715 学生氏名 佐々木結希子

研究の背景

喜多方市は伊勢白子・京都・江戸と並ぶ染型紙の産地であった。会津型は幕末から昭和 10 年代まで小野寺家五代にわたり製作販売をしていた。その中でも明治期を中心とした型紙が大半を占める。紙、渋、刃物など、型にかかわるものは全て会津のものを使用している。会津地方が染型紙の製造に適していたのは農家の副業として良質の和紙が各地で生産されていたのをはじめ、強い渋が得られる豆柿が植えられていたからである。他の地域より有利な条件を備えていたと考えられる。(伊勢は加工商業だったと考えられる。)

1982 年、小野寺家の 6 代目主人が蔵で眠っていた型紙を喜多方市に寄贈したことから、その存在が知られるようになった。小野寺家から喜多方市へ寄贈された型紙 36,925 点、原画 565 点、古文書類 43 点、商印 11 点、道具類等 47 点、約 3700 点が県重要文化財に指定された。

研究の目的

会津型は伊勢型が変化したものである。

会津地域では良質な柿渋が豊富に取れたことから伊勢白子と会津が染型で結びつき、伊勢型や道具類の販売が行われ、結果的に会津型の制作が行われたことも、このような流通があったことが背景にある可能性が高い。伊勢型から会津型に変化する中で会津の地域性や文化を取り入れていったと考えられる。そこで、この研究は伊勢型と会津型を比較しつつ行っていく。

伊勢型を見てみると、型紙の幅広い活用展開をしている。書籍化、型のデータ化、インテリアへの活用など普及の手段を多く持っている。一方会津型の活用展開は文房具、藍染めのハンカチ等の小物である。インテリアへの活用として、会津市役所の会議場の防音壁への活用などがある。このままでは会津型の継承は厳しいものとなる。会津型を継承させるためには、現代に合わせた形でデザイン活用をすべきだと考えた。そこで、会津型の良さを生かしつつ、現代にも通用するインテリア器具、建具のデザインを提案する。

計画(研究のプロセス)



これまでの活動

本の借用。必要書類のスキャン。

文献調査。(会津型、伊勢型、型紙全体の歴史について。)

ワークショップへの参加。

現地調査(染織工房れんが、伊勢型美術館)



成果もしくは考察

会津型は伊勢型が変容したものであるため、類似した型紙が多数ある。会津型を見ると伊勢型よりも線が柔らかくどことなく田舎らしさを感じるものとなっている。自然の型紙も多い。

人間国宝の小宮康孝氏は会津型の特色を以下のように述べている。

1. 東北を代表する文化である。
2. 東北という暗いイメージはあるが、決してそういうものばかりではなく、色気もある
3. 型の面白さは中型にある
4. うまくは言えないが、何とも言えない味がある。
5. 時代と地方色がはっきりしている。

また、会津型の面白さは突き彫りにあるといわれている。書かれた線の上を、正確に小刀をあてて手前から先へ彫っていく引き彫りと違った、突き彫りは、一見して泥臭いようにもみられるが、これは突き彫りと引き彫りの違いであって、会津型はこれらに特色があるといわれている。これらを考慮したうえで、デザイン提案をする。

デザイン提案 1 照明器具

会津の地域性がより濃く表れているものは会津の自然が描かれているものだと考えた。照明器具のうつろいを見ながら、会津型が作られた当時の時代感を感じてほしい。



デザイン提案 2 吸音ボード

喜多方市役所の会議場には会津型がデザインされた吸音ボードがすでにあるが、会津型の良さを生かし切れていないと感じた。そのため、会津型の良さを生かした防音壁をデザイン提案する。伝統的な小紋柄の中にも柔らかい線で彫られた絵柄があり、温かみを感じる会津型らしい型であることから子の型紙を吸音ボードに使用する。

- ・ 安価である
- ・ 厚さ・サイズのバリエーションが豊富
- ・ 重さの割に強度が高い
- ・ 全方向からの力に対して強い
- ・ 伸縮や反りが少ない

これらより合板を使用する



デザイン提案 3 建具

型紙の中には幾何学的な型紙が多数存在する。幾何学的な型紙は建具にしても、現在にも通用するデザインになると考えた。ドアや窓に使用することを想定する。

